

シフト行列型ブラインド MMSE 等化法の復調性能に関する一考察

Analysis of Shift Matrix Type Blind MMSE Equalization for Demodulation Accuracy

張 鴻[†] 堀内 亮[†] 小松 稔^{††} 片貝 悠[†]
 Hong ZHANG Ryo HORIUCHI Minoru KOMATSU Yu KATAKAI
 田邊 造[†] 古川 利博^{††}
 Nari TANABE Toshihiro FURUKAWA

[†] 諏訪東京理科大学 Tokyo University of Science, Suwa ^{††} 東京理科大学 Tokyo University of Science

E-mail: [†] {jg110046@ed, jgh12612@ed, jg110016@ed, nari@rs.suwa}.tus.ac.jp, ^{††} {komatsu.m@ms, furukawa@ms}.kagu.tus.ac.jp

1 はじめに

本論文は、シフト行列型ブラインド MMSE 等化法 [1][2] の復調精度について考察する。この手法は、観測信号の自己相関行列がシフト行列となる性質を用いており、シンプルで実用的な手法であるが、復調精度が安定しない問題が存在している。本論文は、この手法の精度が不安定な理由をを考察している。

2 ブラインド MMSE 等化法の通信方式 [2]

SIMO 通信モデルにおいて、 n 時刻の送信信号 $s(n)$ における観測信号ベクトル $\mathbf{x}(n)$ は

$$\mathbf{x}(n) = \sum_{k=0}^{L_h} \mathbf{h}(k)s(n-k) + \mathbf{v}(n) \quad (1)$$

と表わされる。スタッキングナンバーを M とすれば、すべての観測信号ベクトル $\mathbf{X}_M(n) = [\mathbf{x}^T(n), \mathbf{x}^T(n-1), \dots, \mathbf{x}^T(n-M-L_h+1)]^T$

$$\mathbf{X}_M(n) = \mathbf{H}_M \mathbf{s}(n) + \mathbf{v}_M(n) \quad (2)$$

と表わされる。ここで送信ベクトル $\mathbf{s}(n) = [s(n), s(n-1), \dots, s(n-M-L_h+1)]^T$ 、雑音ベクトル $\mathbf{v}_M(n) = [\mathbf{v}^T(n), \mathbf{v}^T(n-1), \dots, \mathbf{v}^T(n-M+1)]^T$ である。またチャンネル行列 \mathbf{H}_M は $\mathbf{h} = [\mathbf{h}^T(0), \mathbf{h}^T(1), \dots, \mathbf{h}^T(L_h)]$ のシフト行列である。

$$\mathbf{H}_M = \begin{bmatrix} \mathbf{h}(0) & \dots & \mathbf{h}(L_h) & \mathbf{0} & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & \ddots & \dots & \ddots & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & \mathbf{0} & \mathbf{h}(0) & \dots & \mathbf{h}(L_h) \end{bmatrix}. \quad (3)$$

2.1 シフト型等化器ベクトル \mathbf{g} とチャンネル \mathbf{H}_M の関係

等化器ベクトル $\mathbf{g} = [g^1(0), \dots, g^p(0), \dots, g^1(L_p), \dots, g^p(L_p)]^T$ とすれば、MMSE 基準より評価量 $\mathbf{J}(\mathbf{g})$ を次式と表すことができる。

$$\mathbf{J}(\mathbf{g}) = E\{|s(n-d) - \mathbf{g}^H \mathbf{X}_M(n)|^2\} \quad (4)$$

ここで $d \in \{0, 1, \dots, L_h + M + 1\}$ は等化器の遅延である。式 (4) の評価量 $\mathbf{J}(\mathbf{g})$ を偏微分すれば

$$\frac{\partial \mathbf{J}(\mathbf{g})}{\partial \mathbf{g}} = 2E\{|s(n-d) - \mathbf{g}^H \mathbf{X}_M(n)\} \mathbf{X}_M^H(n)\} = 0 \quad (5)$$

$$\mathbf{g} = \mathbf{R}_{XX}^{-1} \mathbf{H}_M(:, d+1) \quad (6)$$

となる。ここで、 $\mathbf{R}_{XX}(k) = E[\mathbf{X}_M(n+k) \mathbf{X}_M^H(n)]$ 、 $\mathbf{H}_M(:, d+1)$ はチャンネル行列 \mathbf{H}_M の第 $d+1$ 列のベクトルである。次章にチャンネルベクトル $\mathbf{H}(:, d+1)$ が未知より、等化器ベクトル \mathbf{g} を求めるために $\mathbf{H}(:, d+1)$ の算出を述べる。

2.2 等化器ベクトル \mathbf{g} の算出

行列 \mathbf{F}_k を $\mathbf{F}_k = \mathbf{R}_{XX}^H(k) \mathbf{R}_{XX}^{-1}(0) \mathbf{R}_{XX}(k)$ とすれば、 $\Delta \mathbf{F}_k$ は次式となる。

$$\Delta \mathbf{F}_k = \mathbf{F}_k - \mathbf{J}^p \mathbf{F}_k (\mathbf{J}^p)^H \\ = \mathbf{H}_M(:, M+L_h-k) \mathbf{H}_M(:, M+L_h-k)^H \quad (7)$$

ここで、 \mathbf{J} はシフト行列である。式 (7) より受信信号ベクトルを用いて $\mathbf{H}_M(:, k)$ を求めた後に、その結果を式 (6) に代入することより、ダイレクトに等化器ベクトルを算出可能となる。

3 考察

2章で簡単に説明したシフト行列型ブラインド MMSE 等化法は、式 (7) 中の行列 \mathbf{F}_k を算出することでランクを落とし、 $\Delta \mathbf{F}_k$ を計算することで、式 (6) で等化器ベクトル \mathbf{g} を求めるのに必要となる $\mathbf{H}_M(:, d+1)$ を得ている。ここで、 \mathbf{F}_k に着目すると、

$$\mathbf{R}_{XX}(k) = E[\mathbf{X}_M(n+k) \mathbf{X}_M^H(n)] \\ = \mathbf{H}[\mathbf{0}, \mathbf{H}_M(:, 1:M+L_h-k)]^H \quad (8)$$

となることより

$$\mathbf{F}_k = \mathbf{H}^T[\mathbf{0}, \mathbf{H}_M(0, 1:M+L_h-k)] \\ \cdot \mathbf{R}_{XX}^{-1}(0) \mathbf{H}[\mathbf{0}, \mathbf{H}_M(0, 1+L_h-k)] \quad (9)$$

となり、正確にランクが落ちることが望まれる。しかしながら、実際のシステムでは、 \mathbf{F}_k の計算で必ずランクが落ちることは難しく、通信環境によるところが大きい。精度が不安定になると考えられる。

4 まとめと今後の展望

本論文では、シフト行列型ブラインド MMSE 等化法が不安定な理由について考察した。ポスターセッションまでにはシミュレーションを用いて明らかにするとともに、この対策を示す予定である。

参考文献

- [1] DAI Song-yin, DONG Shu-pan, YUAN Si-jie. "A Novel Direct Blind MMSE Equalization Algorithm and the Adaptive Implementation" ACTA ELECTRONICA SINICA. Vol.39, No.10, pp.2437-2443, Oct 2011
- [2] J Shen, Z Ding. Direct blind MMSE channel equalization based on second-order statistics J. IEEE Transactions on Signal Processing, 2000, 48(4):1024-1032